

児童期の類推による 問題解決の発達

(2019年度学術研究助成基金助成金 若手研究に採択)



メディアコミュニケーション学部
こどもコミュニケーション学科

大塚紫乃 講師

子どもと接すると、子どもの発想は非常に豊かだと感じられる。また、大人には思いもよらない発言をする時もある。「お母さんはおばあちゃんから生まれたんだよね。じゃあ、お父さんはおじいちゃんから生まれたの?」「にんじん食べると足が速くなるんでしょ?」はその一例である。これらの発言には、子どもが既に持っている知識を、新しい場面に当てはめて考えていることが表れている。一つ目の発言は、「お母さんとおばあちゃんの関係」を既に知っているの、「お父さんとおじいちゃんの関係」を理解するために使っている。二つ目の発言は、「足の速いさきはにんじんが好き」という知識を、「足が早くなるためにはどうしたら良いか」という疑問を考える際に使っている。このような認知的働きは類推と言われ、人にとって欠かせない能力であ

る。子どもはこの類推の能力を用いて、世界を豊かに広げている。これまで、類推能力がどのような過程で発達するのか、研究が行われてきた。前述の子どもの発言から考えると、子どもには子どものなりの視点があるようだ。先行研究では、幼児が課題を類推によって解く際には、本質的な解決方法よりも、見た目の類似性に着目しがちであることが示されてきた(Chen, 1996; 細野, 2011)。実際に行った実験(事前に提示されたお話の解決方法を、問題に当てはめて解決する課題)の中では、4歳児は「さっきのお話と今の問題と似ているところはあった?」と尋ねられると、「課題の」コップと、お話の宝石が似ている」のように「光っている」「見た目の類似性に着目していた。物語を活用して目の前の課題を解くことは、4歳児にとって困難だ

と分かったのである。大人とは異なる視点で、物事の類似性を認識している子どもの姿がここから明らかになってきた。

近年は、教育において知識の活用が重視されている。しかし、子どもの発達を理解して、教育を考える必要がある。大人とは違う視点を持つ子どもに対し、見た目の類似性ではない、本質的な類似性に気づかせ、知識の活用を促す方法があるのか、検証しなければならぬ。

これまでは、類推の発達について、幼児期を対象に研究を行ってきた。5歳後半において、本質的な類似性の一部分に気づくようになることが分かった。その後、児童期はどのような発達を辿るのか。今回の助成を受けて、この点を明らかにしていく。

科学研究費補助金(学術研究助成基金助成金)が交付された研究を紹介します。